



## 高校生のための心理学講座で 何を伝えるべきか

千葉大学文学部 准教授  
牛谷智一（うしたに とまかず）

2016年8月8日に千葉大学西千葉キャンパスで開催された「高校生のための心理学講座」は、106名の参加者を得て盛会裏に終えることができました。当講座は、6名の講師が45分ずつの講演を担当しました。

木村英司先生は、多数のデモンストレーションを用いつつ、我々の視覚システムが曖昧な情報から巧みに外界を復元している過程を解説されました。一川誠先生は、時間と注意に関連する錯視を紹介しながら、我々の時間知覚がどのように環境諸要因に影響されるか解説されました。磯部智加衣先生は、個人としての自分と集団内における自分という2つの観点から、社会心理学が明らかにしてきた知見を概説されました。松香敏彦先生は、空間探索、試験、恋愛という身の回りの例を題材に、計算機シミュレーションがどのような示唆を与えてくれるか解説されました。筆者は、日比野治雄先生の講演に臨席できなかったのですが、ご自身が開発に合わせた工業製品を題材に、心理学がいかにデザイン開発に貢献できるか、解説があったとお聞きしています。私の講演の内容は後述します。

今回の講師6人は、同じ千葉大の中でも異なる部局や教育分野に所属しています。日比野先生は、心理学に研究の基礎を置きながら、工学部の意匠系コースで製品のデザイン開発・評価に従事されています。木村先生、一川先生、磯部先生の所属される文学部心理学専修は、その名の通り、典型的な心理学教育を行っている専修です。一方、松香先生と私は、認知情報科学専修に所属しています。この専修には人工知能研究の阿部明典先生、言語情報処理研究の傳康

晴先生といった方々が所属しており、同じ心理学関連分野であっても、心理学専修とは毛色の異なる教育分野を構成しています。この両専修のなすコントラストは、千葉大学文学部の特色と言えるでしょう。

私の講演は、動物の知性的な行動、認知的な行動のビデオを題材に、「ヒト以外の動物にここはあるのか?」という問いから始めました。続けてワトソンの「行動主義宣言」を中心に、行動主義下の連合学習研究や強化スケジュール研究について簡単に解説したあと、駆け足で動物の認知研究を紹介しました。これまでも高校等に出張講義をするチャンスが何度もありましたが、昔は、もっぱら自分の専門である、動物の知覚世界のユクスキュル的な探求について講演してきました。これはこれで、デモンストレーションも多用して、それなりに受講者の興味を引くところではあったと思います。しかし、最近では、行動主義宣言を中心に比較心理学の歴史について必ず話すことにしています。

各地で行われている「高校生のための講座」の広告を眺めると、高校生講座の中で比較心理学の歴史に時間を割いている講座は他にどれほどあるだろうか、と疑問に思います。ひいては、動物の心理学研究を取り扱うラボが減少していく中、多くの大学にある心理学系教育課程や教養教育の心理学関連科目の中で、行動主義にどれだけ言及しているのだろうか、と心配しないではられません。これは日本だけの現状ではないらしく、比較心理学が危機に瀕していると危惧する意見論文が *Frontiers in Psychology* 誌に発表され、これに回答した論文が続けて発表されるなど、ちょっとした誌上



### Profile—牛谷智一

京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員（DC）（2002～2004年）を経て、2005年から現職。マコーリー大学客員教授（2012～2013年）。専門は比較認知。著書は『心理学研究法4 発達』（分担執筆，誠信書房），『動物たちは何を考えている？：動物心理学の挑戦』（分担執筆，技術評論社）など。

討論となりました。

心理学の主流が、行動主義心理学から認知心理学へと移行した現在も、心理学に高い客観性、信頼性をもたらした行動主義の価値は、忘れられるべきものではありません。出張講義での高校生とのやり取りを振り返っても、要因を厳密に統制しながら、安易な言語教示・内観報告に頼らず、客観性を担保していく「現代心理学の根本精神」を教えるには、まず行動主義のエッセンスを教えることが近道だと実感させられました。私自身は認知主義者で、動物の認知を研究していますが——行動主義と認知主義の最重要争点は、実は領域固有性ではないかと思っ

ていますが、これについてはまたどこかで——、常に行動主義的な観点で自らの研究を厳しく見つめる作業の必要性を心に留めています。ただし、私は、授業には出ても話を聞かなかった不良学生だったので、学部2年生のときに履修した清水御代明先生の心理学概論の中身は、ほとんど覚えていません。3年生になって少々心を入れ替えて履修した藤田和生先生の講義で少しは勉強しましたが、体系的な心理学史の全体像をまともに勉強しなかったのは、生涯の汚点です。私のような不良は論外にせよ、真面目な大学生がどれほど比較心理学について学ぶことができているか、私の危惧が杞憂であればよいのですが。

この危惧を増幅させるきっかけがありました。一昨年、千葉大学で認知科学会の年次大会が開催され、スタッフとして参加しました。認知科学会は、同僚の傳先生や松香先生が活躍する学会なのですが、私自身は（会員であるにもかかわらず）参加したのは初めてでした。同じ認知を扱いながら、心理学系の学会と大きく

違うのは、対話、福祉、学校教育、芸術・創作といった現実の個別場面での研究が多いことです。それぞれ大変興味深く、面白いのですが、心理学ではないので、「それって学習の一般法則から説明できますよね」なんて議論は、あまり見られません。もちろん、領域固有性を強調する伝統があるならば、グランドセオリーなどどうでもよいのかもしれませんが、心理学で長い間培われてきたミクロな行動の原理の知見が、すぐ隣の分野で一切活かされていないように思えることは、歯がゆい感じがします。

これは認知科学だけの現象ではないようです。神経科学でも、心理学が長い間論じてきた問題が、その歴史にふれられることなく新たな問題として扱われることがあるそうです。私も、ミツバチの嗅覚刺激弁別で「新たに」見られたピークシフト現象について、神経行動学者たちが、スペンスのモデル（Spence, 1937）について何も知らないまま議論を進めているのを聞いたことがあります。

お前が言うな、というお叱りは覚悟しつつ言いますが、比較心理学は、この100年に得られた知見や培った手法をもっと現在の心理学や隣接領域で活かせるはずです。そのためには、やはり心理学系の教育課程のある大学では、行動主義を中心とした比較心理学の歴史を教え、教養課程の心理学科目や、高校生・一般人向け出前授業でも、行動主義のエッセンスに言及することが必須ではないかと感じています。

### 文献

Spence, K. W. (1937) The differential response in animals to stimuli varying within a single dimension. *Psychological Review*, 44, 430-444.